



TITLE:

畿内及び周辺の木地師に関する研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

杉本, 壽

CITATION:

杉本, 壽. 畿内及び周辺の木地師に関する研究. 京都大学, 1965, 農学博士

ISSUE DATE:

1965-06-22

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211594>

RIGHT:

氏 名	杉 本 壽
	すぎ もと ひさし
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 94 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 6 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	畿内及び周辺の木地師に関する研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 三 橋 時 雄	教 授 柏 祐 賢	教 授 糸 原 正 信
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

木地師とは山中の広葉樹を伐って轆轤その他の工作器具で椀・盆・杓子などの木地を製作した人々のことで、轆轤師ともいう。本論文はこれまで一部の民俗学者によって断片的にしか取り上げられなかった木地師制度を、歴史学の立場から総合的に研究したもので、その生成・発展・変質・衰退の過程を追究するとともに、その盛期である江戸時代の木地師に関する制度・組織ならびに木地師の生活状態を究明している。

序論第1章では木地師の語義、木地師制度の概要を述べ、同第2章では木地師研究の歴史、重要性、目的について記している。

本論第1章では原始時代・古代における木地の製作と、平安時代に木地師に関する組織・制度が成立する過程を述べ、宮廷の轆轤関係者が諸国豪族の招聘に応じて地方に赴いた中で最も勢力を有した藤原（小椋）実秀以下9名の轆轤工たちが、惟喬親王を奉じて近江國小椋荘に抛り、日本国中の木地師を支配する体制を作り上げたとしている。

第2章では、このような木地師に関する組織の発展と、木地師集落が全国的に広がって行く地域的発展の経路ならびにその分布状態を解明し、木地師が我が国における美林の形成に及ぼした影響（木地師の伐木と御礼杉による美林の形成）についても触れている。

第3章では木地師の根源地近江の筒井公文所・高松御所の史料とくに氏子狩（駈）帳によって、本所と全国に散在する木地師村落との間に、氏子狩という特異な制度が存在したことを明らかにするとともに、木地生産の技術と製品、労働組織、販売組織をはじめ、木地の座と株仲間、都市漆器問屋の木地生産支配など、経済史上の重要問題についても論述している。

第4章では木地師の定着農化と先住農村との関係を見るとともに、木地師集落の状況、木地師の衣食住、同族意識、宗教など、木地師の生活面について検討を加えている。

木地師制度の変質と衰退を取り扱った第5章では、江戸中期から、木地師の職頭としての木地頭が、以

前その隷属下にあった塗物師の変質した都市漆器問屋の傘下に組み込まれざるを得なくなることや、以前の木地師が近代には金属轆轤挽物工業やエボナイト系挽物工業へ参加することによって木地師制度が変質する過程を述べ、併せて木地師の定着農化や離村によって木地師制度が衰退する過程をも究明している。

結論は以上の総括である。

論文審査の結果の要旨

本論文は前述のように従来は主として民俗学者によって断片的に問題とされるに過ぎなかった木地師制度を、歴史学の立場から取り上げ、大和吉野郡高原文書からは中世後期における木地師について、また近江筒井公文所・高松御所の氏子狩（駈）帳と諸国木地師村落の史料からは、近世における木地師村落の分布と木地師制度について究明し、木地師の生成・発展・変質・衰退の過程についても、これを総合的・体系的に検討した。その結果として、(1)木地師の生成・発展・変質・衰退の概要、(2)盛時における木地師の制度、(3)木地師村落の特質が判明したばかりでなく、次のような諸点が明らかにされた。

(a) わが国の山村の中には木地師の開発した村や、木地師と関係のある村が多く、近世における国の数からすれば40カ国に跨がり、戦前の市町村数では著者の確認したものだけでも1414を数えることができる。

(b) これら木地師村落が全国的に分布して行った経路ないし系統としては、近江を根源とする4系統と、大和を系統とする1系統とが検出される。

(c) 木地師村落と木地師の本所といわれる近江筒井八幡宮との間には、講金を徴収したりする氏子狩という特異な制度が存在した。

(d) 木の生産に必要な広葉樹の伐採と、伐木跡へ御礼杉として杉・桧を植樹したことは、わが国美林の形成に役立つところがあった。

本論文の中で明らかにされた特筆すべき点としては、上記のようなことが挙げられるが、このほかに、本論文には農史という観点からみて幾多の新知見が見出され、本論文を価値の高いものとしている。

要するに本論文は、これまで軽視されてきた木地師の歴史的な役割を重視し、これを総合的・体系的に研究したもので、この種の研究としては最初のものであり、その中には農史研究の上に参考となる多くの新知見が含まれている。もっとも本論文にも、なお解明しつくされていない点が無いわけではないが、しかし前人未踏の山奥に初めて開拓の鋤を入れたものであるという意味において、本論文が、参考論文「林野入会権の研究」ならびに「封建経済構造の崩壊過程」とともに、日本の農林業史研究上に寄与した功績は大きい。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。